

[B年] 聖霊降臨節第6主日(2023年7月2日)

【旧約聖書日課】 ルツ記1章1~18節(19~22節)

¹士師が世を治めていたころ、飢饉が国を襲ったので、ある人が妻と二人の息子を連れて、ユダのベツレヘムからモアブの野に移り住んだ。²その人は名をエリメレク、妻はナオミ、二人の息子はマフロンとキルヨンといい、ユダのベツレヘム出身のエフラタ族の者であった。彼らはモアブの野に着き、そこに住んだ。³夫エリメレクは、ナオミと二人の息子を残して死んだ。

⁴息子たちはその後、モアブの女を妻とした。一人はオルバ、もう一人はルツといった。十年ほどそこに暮らしたが、⁵マフロンとキルヨンの二人も死に、ナオミは夫と二人の息子に先立たれ、一人残された。⁶ナオミは、モアブの野を去って国に帰ることにし、嫁たちも従った。主がその民を顧み、食べ物をお与えになったということを彼女はモアブの野で聞いたのである。⁷ナオミは住み慣れた場所を後にし、二人の嫁もついて行った。

故国ユダに帰る道すがら、⁸ナオミは二人の嫁に言った。「自分の里に帰りなさい。あなたたちは死んだ息子にもわたしにもよく尽くしてくれた。どうか主がそれに報い、あなたたちに慈しみを垂れてくださいますように。⁹どうか主がそれぞれに新しい嫁ぎ先を与え、あなたたちが安らぎを得られますように。」ナオミが二人に別れの口づけをすると、二人は声をあげて泣いて、¹⁰言った。「いいえ、御一緒にあなたの民のもとへ帰ります。」

¹¹ナオミは言った。「わたしの娘たちよ、帰りなさい。どうしてついて来るのですか。あなたたちの夫になるような子供がわたしの胎内にまだいるとでも思っているのですか。¹²わたしの娘たちよ、帰りなさい。わたしはもう年をとって、再婚などできはしません。たとえ、まだ望みがあると考えて、今夜にでもだれかのもとに嫁ぎ、子供を産んだとしても、¹³その子たちが大きくなるまであなたたちは待つつもりですか。それまで嫁がずに過ごすつもりですか。わたしの娘たちよ、それはいけません。あなたたちよりもわたしの方がはるかにつらいのです。主の御手がわたしに下されたのですから。」¹⁴二人はまた声をあげて泣いた。オルバはやがて、しゅうとめに別れの口づけをしたが、ルツはすがりついて離れなかった。

¹⁵ナオミは言った。「あのとおり、あなたの相嫁は自分の民、自分の神のもとへ帰って行くこととしている。あなたも後を追って行きなさい。」

¹⁶ルツは言った。「あなたを見捨て、あなたに背を向けて帰れなどと、そんなひどいことを強いないでください。」

わたしは、あなたの行かれる所に行きお泊まりになる所に泊まります。あなたの民はわたしの民、あなたの神はわたしの神。」

¹⁷あなたの亡くなる所でわたしも死に、そこに葬られたいのです。死んでお別れするのならともかく、そのほかのことであなたを離れるようなことをしたなら、主よ、どうかわたしを幾重にも罰してください。」

¹⁸同行の決意が固いを見て、ナオミはルツを説き伏せることをやめた。¹⁹二人は旅を続け、ついにベツレヘムに着いた。

ベツレヘムに着いてみると、町中が二人のことでよめき、女たちが、ナオミさんではありませんかと声をかけてくると、²⁰ナオミは言った。「どうか、ナオミ(快い)などと呼ばないで、マラ(苦い)と呼んでください。全能者がわたしをひどい目に遭わせたのです。」

²¹出て行くときは、満たされていたわたしを

まはうつろにして帰らせたのです。なぜ、快い(ナオミ)などと呼ぶのですか。

主がわたしを悩ませ、全能者がわたしを不幸に落とされたのに。」
²²ナオミはこうして、モアブ生まれの嫁ルツを連れてモアブの野を去り、帰って来た。二人がベツレヘムに着いたのは、大麦の刈り入れの始まるころであった。

【使徒書日課】 使徒言行録 11章4~18節

⁴そこで、ペトロは事の次第を順序正しく説明し始めた。⁵「わたしがヤッファの町にいて祈っていると、我を忘れたようになって幻を見ました。大きな布のような入れ物が、四隅でつるされて、天からわたしのところまで下りて来たのです。⁶その中をよく見ると、地上の獣、野獣、這うもの、空の鳥などが入っていました。⁷そして、『ペトロよ、身を起し、屠って食べなさい』と言う声を聞きましたが、⁸わたしは言いました。『主よ、とんでもないことです。清くない物、汚れた物は口にすることがありません。』⁹すると、『神が清めた物を、清くないなどと、あなたは言うてはならない』と、再び天から声が返って来ました。¹⁰こういうことが三度あって、また全部の物が天に引き上げられてしまいました。¹¹そのとき、カイサリアからわたしのところに差し向けられた三人の人が、わたしたちのいた家に到着しました。¹²すると、「霊」がわたしに、『ためらわないで一緒に行きなさい』と言われました。ここにいる六人の兄弟も一緒に来て、わたしたちはその人の家に入ったのです。¹³彼には、自分の家に天使が立っているのを見たこと、また、その天使が、こう告げたことを話してくれました。『ヤッファに人を送って、ペトロと呼ばれるシモンを招きなさい。¹⁴あなたと家族の者すべてを救う言葉をあなたに話してくれる。』¹⁵わたしが話だすと、聖霊が最初わたしたちの上に降ったように、彼らの上にも降ったのです。¹⁶そのとき、わたしは、『ヨハネは水で洗礼を授けたが、あなたがたは聖霊によって洗礼を受ける』と言っておられた主の言葉を思い出しました。¹⁷こうして、主イエス・キリストを信じるようになったわたしたちに与えてくださったのと同じ賜物を、神が彼らにもお与えになったのなら、わたしのような者が、神がそうなるのをどうして妨げることができたでしょうか。」¹⁸この言葉を聞いて人々は静まり、「それでは、神は異邦人をも悔い改めさせ、命を与えてくださったのだ」と言って、神を賛美した。

【福音書日課】 ルカによる福音書17章11~19節

¹¹イエスはエルサレムへ上る途中、サマリアとガリラヤの間を通られた。¹²ある村に入ると、重い皮膚病を患っている十人の人が出迎え、遠くの方に立ち止まったまま、¹³声を張り上げて、「イエスキュー、先生、どうか、わたしたちを憐れんでください」と言った。¹⁴イエスは重い皮膚病を患っている人たちを見て、「祭司たちのところに行つて、体を見せなさい」と言われた。彼らは、そこへ行く途中で清くされた。¹⁵その中の一人は、自分がいやされたのを知って、大声で神を賛美しながら戻って来た。¹⁶そして、イエスの足もとにひれ伏して感謝した。この人はサマリア人だった。¹⁷そこで、イエスは言われた。「清くされたのは十人ではなかったか。ほかの九人はどこにいるのか。¹⁸この外国人のほかに、神を賛美するために戻って来た者はいないのか。」¹⁹それから、イエスはその人に言われた。「立ち上がって、行きなさい。あなたの信仰があなたを救った。」

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

ルツ記 1章1~18 (19~22) 節

1士師たちが世を治めていたころ、国で飢饉が起こったので、ある男がユダのベツレヘムからモアブの野に身を寄せようとして出て行った。妻と二人の息子が一緒にあった。2彼らはユダのベツレヘム出身のエフラタ人で、男の名はエリメレク、妻の名はナオミ、二人の息子はマフロンとキルヨンと言った。彼らはモアブの野に着いて、そこに住んだ。

3だがナオミの夫エリメレクは死に、ナオミは二人の息子と共に残された。4やがて息子たちはモアブの女をめぐらした。一人の名はオルバ、もう一人の名はルツと言った。彼らはそこに十年ほど暮らしていたが、5マフロンとキルヨンの二人も死んだ。こうしてナオミは二人の息子と夫に先立たれた。

6そこで、ナオミは嫁たちと連れ立って、モアブの野から帰ることにした。主がその民を顧み、人々に食物をお与えになっていることをモアブの野で耳にしたからである。7彼女は二人の嫁と一緒に、住んでいた所を出て、ユダの地に帰って行った。

8ナオミは二人の嫁に言った。「さあ、それぞれ自分の家に帰りなさい。あなたがたは亡くなった息子たちと共に生きてくたえなさい。それと同じように、主があなたがたに慈しみを示してくださいように。9主があなたがたそれぞれに、安らぐことのできる嫁ぎ先をお与えくださいますように。」ナオミが口づけをすると、二人は声をあげて泣いて、10言った。「私たちはあなたと一緒に、あなたの民のところに帰ります。」

11しかしナオミは言った。「帰りなさい、娘たち。どうして私と一緒にいるのですか。あなたがたの夫になるような子がわたしのおなかにまだいるのでも思っているのですか。12帰りなさい、娘たち。行きなさい。私は夫を持つには年を取り過ぎています。たとえ私が自分にはまだ望みがあると考え、今夜にでも夫を持ち、男の子を産んだとしても、13あなたがたはその子が大きくなるまで待つというのですか。それまで、あなたがたは夫を持たないままいるのですか。それはいけません、娘たち。あなたがたよりも私の方がはるかにつらいのです。主の手が私に下ったのですから。」14二人は声をあげてまた泣いた。オルバはしゅうとめに口づけをしたが、ルツはしゅうとめに抱きついて離れなかった。

15ナオミは言った。「御覧なさい。オルバは自分の民のもとに、自分の神のもとに帰って行きました。あなたも彼女の後を追って帰りなさい。」16しかしルツは言った。

「あなたを見捨て、あなたに背を向けて帰るなど、そんなひどいことをさせないでください。あなたが行かれる所に私は行き、あなたがとどまる所に私はとどまります。あなたの民は私の民、あなたの神は私の神です。17あなたが死なれる所で私は死に、そこに葬られたいのです。死に別れでなく、私があなたと別れるならば、主が幾重にも私を罰してくださいように。」

18ナオミは、ルツと一緒に行くことと決意を固めているのを見て、それ以上言うのはやめた。

19二人は旅を続け、ついにベツレヘムに着いた。ベツレヘムに着くと、町中が彼女たちのことで騒ぎ出し、女たちは、「まあ、ナオミではありませんか!」と言った。

20ナオミは女たちに言った。「ナオミとは呼ばずに、マラと呼んでください。全能者がわたしをひどく苦しめた

のです。21私は満ち足りて出かけて行ったのに、主は私を身一つで帰されたのです。どうして、私をナオミと呼ぶのですか。主は私を痛めつけ、全能者は私に災いを下されたのです。」

22ナオミがモアブの野から来た嫁、モアブの女ルツと一緒に帰り、ベツレヘムに着いたのは、大麦の刈り入れが始まった頃であった。

使徒言行録 11章4~18節

4そこで、ペトロが口火を切って、事の次第を順序正しく説明した。5「私がヤッファの町にいて祈っていると、我を忘れたようになって幻を見ました。大きな布のような入れ物が、四隅でつるされて、天から私のところまで降りて来たのです。6その中をよく見ると、地の四つ足の獣、野の獣、このもの、空の鳥などが入っていました。7そして、『ペトロ、身を起し、屠って食べなさい』と言う声を聞きましたが、8私は言いました。『主よ、とんでもないことです。清くない物、汚れた物は口にすることがありません。』9すると、『神が清めた物を、清くないなど言ってはならない』と、再び天から声が返って来ました。10こういうことが三度あって、全部の物がまた天に引き上げられました。

11ちょうどその時、カイサリアから私のところに差し向けられた三人の人が、私たちのいた家に着きました。12すると、霊が私に、『ためらわないで一緒に行きなさい』と言われました。ここにいる六人の兄弟も一緒に来て、私たちはその人の家に入ったのです。13すると彼は、自分の家に天使が立っているのを見、また、その天使がこう告げたと仰ぐのです。『ヤッファに人を送って、ペトロと呼ばれるシモンを招きなさい。14あなたと家族の者すべてを救う言葉を話してくれる。』15私が話したすと、聖霊が最初私たちの上に降ったように、彼らの上にも降ったのです。16その時、私は、『ヨハネは水で洗礼を授けたが、あなたがたは聖霊によって洗礼を受ける』と言われた主の言葉を思い出しました。17こうして、主イエスキリストを信じた私たちにお与えくださったのと同じ賜物を、神が彼らにもお与えになったのなら、私のような者が、どうして神のなさることを邪魔することができたでしょうか。18この言葉を聞いて人々は静まり、「それでは、神は異邦人をも悔い改めさせ、命をお与えくださったのだ」と言って、神を崇めた。

ルカによる福音書 17章11~19節

11イエスはエルサレムに進んで行く途中、サマリアとガリラヤの間を通られた。12ある村に入られると、規定の病を患っている十人の人が出迎え、遠くに立ったまま、13声を張り上げて、「イエス様、先生、私たちを憐れんでください」と言った。14イエスは彼らを見て言われた。「行って、祭司たちに体を見せなさい。」彼らは、そこへ行く途中で清くされた。15その中の一人は、自分が癒されたのを知って、大声で神を崇めながら戻って来た。16そして、イエスの足元にひれ伏して感謝した。この人はサマリア人だった。17そこで、イエスは言われた。「清くされたのは十人ではなかったか。ほかの九人はどこにいるのか。18この外国人のほかに、神を崇めるために戻って来た者はいないのか。」19それから、イエスはその人に言われた。「立ち上がって、行きなさい。あなたの信仰があなたを救った。」

黙想のためのノート

次主日の教会暦と聖書日課

・7月2日「聖霊降臨節第6主日」の日課主題は「すべての人に対する教会の働き」。

・旧約聖書日課は、「ルツ記」から、物語冒頭の1章。使徒書日課は、「使徒言行録」から、百人隊長コルネリウスの洗礼に至った経緯を仲間たちの前でペトロが説明する箇所。福音書日課は、主イエスが十人の悪い皮膚病の人たちを癒した逸話箇所。

旧約日課(ルツ1章より)

・「ルツ記」は、ユダヤ正典(ヘブライ語聖書)「諸書」に区分される伝承物語文書で、ダビデ王の祖父オベドの誕生譚という体裁の結語がある。本書は、アシュケナジ系ユダヤ人の間では「五つの巻物(ハメシュ・ハ・メギロット)」の一つとして扱われる。「五つの巻物」に含まれるのは、「ルツ記」のほか、「雅歌」「哀歌」「コヘレトの言葉」「エステル記」で、これらの文書は決まった祝祭日の典礼で朗読されてきた。「ルツ記」は、ユダヤ教三大祭の一つ「七週祭」に際して朗読される。

・本書物語の時代設定は、王国時代に先行する士師時代となっているが、伝承物語としてどの時代まで遡れるかは不明。バビロン捕囚時代後のペルシア支配時代に最終的な編集がなされた上で典礼に組み込まれ、正典化したと考えられている。ダビデ王のルーツに関する物語として完結されていることから、「歴代誌」などと同様に「ダビデ王家至上主義者」の手によるものとも考えられるが、他方で、そのルーツに「申命記」法の規定で「イスラエル」の会衆となることが許されない「モアブ人」ルーツが存在していると物語っていることから、「ユダヤ教普遍主義」の思想を読み取ることもできる。バビロン捕囚後に成立形成しつつあった「ユダヤ教」における「ユダヤ民族・ダビデ王家至上主義」と「モーセ律法・多民族普遍主義」という路線対立を超克する意図で、本書が編集され、正典化したと考えることもできよう。

・「ルツ」の帰属する「モアブ人」は、「旧約」において「アンモン人」と共に、「ユダ・イスラエル」にとってヨルダン川を挟んだ東側の隣人として認識されてきた人々。そのルーツを、「創世記」は、アブラハムの甥ロトにあるとしている(創 19:30-38)。「申命記」法が「アンモン人とモアブ人」を「イスラエルの会衆に加わること」から排除している規定(申 23:4-7)も、その理由として歴史的に彼らが「イスラエル」を排除しようとしたことに対する報復であることが挙げられている。「モアブ人」が「ユダ・イスラエル」に対抗しうる王国を形成していた時代があることは、北王国オムリ王の時代の戦争を伝える碑文によって知られているが、実際には、「ユダ」や「イスラエル」が同族と見ながらも従属しようとする周辺諸部族の一つとして認識されていた人々だったのだろう。元来の「ルツ記」には、彼らを「ユダ」に同化する意図があったのかもしれない。

使徒書日課(使徒言行録 11章より)

・「使徒言行録」の全般の特徴については、前回までの資料を参照。

・日課箇所は、前段 10章で物語られる「百人隊長コルネリウスの洗礼」の逸話を受けて、その経緯をエルサレム教会の仲間にペトロが説明する内容となっている。初期教会における異邦人の洗礼入会については、すでに 8章で「フィリポによるエチオピアの高官の洗礼」の逸話が物語られていた。それに先立って、同じ 8章では、「フィリポによるサマリア人らの洗礼」の逸話も物語られており、当初「120人」から始まった彼ら「使徒の教会共同体」への新規加入が、「エルサレムに住む信心深いユダヤ人」(2:5)、「ギリシア語を話すユダヤ人(ディアスポラ系ユダヤ人)」(6:1)、「ユダヤ人と同根のサマリア人」、「異邦人」と徐々に拡張されてきたものとして描かれてきた。おそらく、この「サマリア人」から「異邦人」へと拡張される段階にきて、初期教会内で「教会共同体」の枠組みを巡る神学的な論争が生じ始めたのだろう。それに対する一定の方向性を示すことになったのが、ペトロの関わった「コルネリウスの洗礼」の出来事であったと、「使徒言行録」は位置づけようとしていると考えられる。

・「コルネリウスの洗礼」の物語の中に組み込まれているが、ここには、逸話として区別される「ペトロの見た幻」の逸話がある。この「幻」でペトロが問われている課題は、「異邦人問題」ではなく、「食物規定問題」である。すなわち、「レビ記」11章で規定され「ユダヤ人」の生活習慣として深く根付いていた「食物規定」によって、彼らは、「食べてよいもの」と「食べてはならないもの」を厳密に守っていたが、その規定に基づく習慣は、他民族との間に大きな隔たりを生じさせるものもなっていて、現実的には「食事」を共にすることができなくなっていた。このことは、「異邦人問題」の最初の障壁ともなることであったが、必ずしも避けて通れない問題ではなかった。つまり、当時の主流ユダヤ教では、すでに「異邦人」を「神を畏れる者」と呼ぶ求道者として会堂礼拝に加えるばかりか、割礼を受け律法規定遵守を誓約する「改宗者」として「ユダヤ人共同体」に完全に受容することをしてきていたが、その際には、元「異邦人」が「ユダヤ人」としての「食物規定」に従えばよかったのである。その意味で、「異邦人問題」と「食物規定問題」は区別される問題であった。

・「コルネリウス」は、10:1で「カイサリア」駐在のローマ軍部隊のうち「イタリア隊」の「百人隊長」であったと紹介されている。「イタリア隊」は、ローマ軍団内でもローマ市民権を持つ有志によって結成された部隊として知られ、「ローマ軍人」としての矜持のみならず、「ローマ人」としての誇りを共有していたと考えられる。「カイサリア」は「ユダヤ総督府」が置かれた州都で、総督の護衛などを担当していた可能性もある。当時、ローマ市民権を有するローマ人が「ユダヤ教」に改宗する社会的動機はほとんどなかったと考えられるが、そのよう

なローマ人の中に、「ユダヤ教」に共感する「神を畏れる者」= 求道者となる者があったと描くことには、「使徒言行録」著者の明白な意図が読み取れる。つまり、「ユダヤ教」には、異邦人にとっても内的動機を呼び覚ます真理があるが、主流の「ユダヤ教共同体」は、そのような内的動機を持つ異邦人を十分に受けとめ切れていない現実がある。他方で、真の「ユダヤ教」を企図する「使徒たちの教会共同体」は、彼ら内的動機を持つ異邦人を十全に受けとめることに当初から取り組み得たのだ、と本書著者は、この逸話物語を展開しているのである。

福音書日課(ルカ 17 章より)

・日課箇所は、主イエスが十人の重い皮膚病者を癒した逸話。十人のうち一人は「サマリア人」と特定されているが、ほかの九人の帰属は示されていない。この逸話の場面が「サマリアとガリラヤの間を通られた」ときのこととして描かれていることから、十人の中に「サマリア人」と「ガリラヤ系ユダヤ人」の両方が含まれていたことが示唆されるが、全員「サマリア人」であった可能性も否定できない。行政区分上の「サマリア」と「ガリラヤ」の境界線は、北部イズレエル平野付近に設定されているが、「聖書」が想定する「サマリア人」の居住地は、彼らの聖所神殿が建てられていた「ゲリジム山」を中心とする地域であったので、ガリラヤ地方からサマリア人居住地域を抜けてユダヤ地方に至る街道沿いが想定されているのだろう。

・「サマリア人」は、バビロン捕囚後にエルサレムを中心に再建された「ユダヤ共同体」と袂を分けることになった分派として位置づけられるが、歴史的なルーツは複雑である。ゲリジム山には王国時代から聖所があり、北王国時代にはサマリア王権と対立する勢力として存在していた一方、南王国ダビデ王権には協調的だったとも考えられている。彼らの末裔は、今日でも「サマリア五書」と呼ばれる「律法」に相当する正典を保持し、古いイスラエル宗教の祭儀を維持している。これらのことから、彼らは、歴史的に南王国の中央聖所であるエルサレム神殿に「モーセの宗教」をもたらず役割を果たしながら、バビロン捕囚後にエルサレム神殿中心主義の再建「ユダヤ教共同体」から排除され、対立関係になった集団と推察される。「ルカ文書」(福音書+使徒言行録)では、「サマリア人」への好意が隠されていない。

・「重い皮膚病を患っている人(レプロス)」は、かつて「らい病者」と訳されていたが、医学史研究から、いわゆる「らい病(ハンセン病)」とは異なる皮膚病であると理解されるようになり、翻訳が見直されてきた。しかし、感染防止策として社会的隔離が実践されてきた病であることに変わりはない。

来週の誕生日 (7月2日~8日)

主日礼拝の讚美歌から

- ・21-352 番「来たれ全能の主」(= I 67 番)は、18 世紀英国メソジスト運動の中でイギリス国歌の曲に合わせて替え歌として歌われるようになった作者不詳の歌詞。曲は、この歌詞のためにイタリアの音楽家 ジャルディーニが作曲。
- ・21-425 番「こすずめも、くじらも」は、1983 年、米国ミズーリ州のコンコーディア・ルーテル教会の設立 110 周年記念のために新しく作られ(作詞作曲は 82 番「今こそここに」と同じコンビ)、後に諸教派の讚美歌集に採用された。
- ・21-560 番「主イエスにおいては」(= I 419 番「主イエスにありては」)は、英国の作家ジョン・オクセナムの作詞で、『讚美歌 21』編纂に際して改訳されている。曲は、19 世紀英国の音楽家 A・レイナグルの作曲で、94 番でも使用。

21-352「来たれ、全能の主」

Come, Thou Almighty King

1. Come, thou almighty King, / help us thy name to sing, / help us to praise! / Father all glorious, / o'er all victorious, / come and reign over us, Ancient of Days!
2. Come, thou incarnate Word, / gird on thy mighty sword, / our prayer attend! / Come, and thy people bless, / and give thy word success; / Spirit of holiness, on us descend!
3. Come, holy Comforter, / thy sacred witness bear / in this glad hour. / Thou who almighty art, / now rule in every heart, / and ne'er from us depart, Spirit of power!
4. To thee, great One in Three, / eternal praises be, / hence, evermore. / Thy sovereign majesty / may we in glory see, / and to eternity love and adore!

21-425「こすずめも、くじらも」

God of the Sparrow

1. God of the sparrow / God of the whale / God of the swirling stars / How does the creature say Awe / How does the creature say Praise
2. God of the earthquake / God of the storm / God of the trumpet blast / How does the creature cry Woe / How does the creature cry Save
3. God of the rainbow / God of the cross / God of the empty grave / How does the creature say Grace / How does the creature say Thanks
4. God of the hungry / God of the sick / God of the prodigal / How does the creature say Care / How does the creature say Life
5. God of the neighbour / God of the foe / God of the pruning hook / How does the creature say Love / How does the creature say Peace
6. God of the ages / God near at hand / God of the loving heart / How do your children say Joy / How do your children say Home

21-560「主イエスにおいては」

In Christ there is no East or West

1. In Christ there is no east or west, / in him no south or north, / but one great fellowship of love / throughout the whole wide earth.
2. In Christ shall true hearts everywhere / their high communion find; / his service is the golden cord / close-binding humankind.
3. Join hands, disciples of the faith, / whate'er your race may be. / All children of the living God / are surely kin to me.
4. In Christ now meet both east and west; / in him meet south and north. / All Christly souls are one in him / throughout the whole wide earth.